
筑前琵琶研究序説

山本百合子 福岡教育大学教育学部准教授・愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

はじめに

《走れメロス》《銀河鉄道の夜～さそり火》《一寸法師》《レクイエム》、これらは、筆者が近年たびたびその演奏に触れる機会を得た筑前琵琶の若手演者やその弟子らによって、筑前琵琶発祥地の福岡周辺でこの一年余りの間に上演された曲目の一部である。

日本の琵琶楽の一種である筑前琵琶の成立は「明治中期に盲僧琵琶の流れをくむ橘智定が出、薩摩へ出かけて薩摩琵琶を研究して帰り、一種の新琵琶楽を創作した。」と説明され¹、少ないながらも市販されている視聴覚ソフトの収録曲や、国立劇場等で数年に一度上演される曲も、《祇園精舎》《扇的的》などの『平家物語』の題材や、《湖水渡》《西郷隆盛》といった中世あるいは近代の武勇伝を題材とする曲がおおかたを占め、先行の琵琶楽である平曲や薩摩琵琶の強い影響のもとに「故事や伝説の中の勇壮な場面を語る古典的な音楽」という概観を印象づける種目となっている。しかし昨今の福岡での現代の様々な演奏においては、歴史上の悲惨な合戦の情景だとか武士道を貫こうとする侍の姿を描くような作品だけでなく、戦後の平和な時代を生きてきた現代の人々の日常的な心情にも共感を呼ぶような物語の曲、或いは地域の出来事を後世へ語り継ごうとするような内容の曲が、聴き手の期待に応えるかたちで上演され、そのために当代の筑前琵琶奏者たちは次々に新たな曲を創り語ろうとしているように見受けられるのである。

そもそも筑前琵琶は、明治中後期すなわち 19 世紀末から 20 世紀初頭に生まれた非常に新しい芸能であり、江戸時代までに形成された他の多くのいわゆる伝統芸能とは異なり、表現や題材そして伝承や上演の上で近現代ならではの嗜好や目的を反映しながら独自の役割を担ってきたと思われる。大正期 (20 世紀前半) の十数年という短期間に大流行した後、昭和期に入ると急速に衰勢した経緯にも特殊な時代背景があろう。筑前琵琶という芸能は近代そして現代をどのように生きてきたのか、筑前琵琶の実態を通じて近現代日本社会における芸能の展開の一例を捉えたいと考えて福岡における筑前琵琶の展開の研究に

着手した。

本稿ではまずはその序説として筑前琵琶の成立のいきさつを先学の研究をもとに詳しく辿ることで、筑前琵琶という日本の近代芸能の本来の性質を確認したいと思う。

1. 筑前琵琶の成立をめぐる三人の名手

筑前琵琶の成立が語られる時に必ず名前が上がるのが、橘智定(後に橘流/旭会の初代家元橘旭翁 嘉永元(1848)～大正8(1919)年)、鶴崎賢定(後に鶴崎流初代家元霞外 元治元(1864)～大正10(1921)年)、吉田竹子(後に吉田流初代家元端晃 明治4(1871)～大正12(1923)年)の三人であり、いずれも幕末から明治初期の博多に生まれた琵琶の名手であった。この三人が筑前琵琶という新種目を成立させるまでの経緯から再確認したいと思う。三人の経歴や当時の世情を確認する先行研究として、入江寿紀「明治の筑前琵琶(1)～(9)」²、井上精三「筑前盲僧と筑前琵琶」³、大坪草二郎『筑前琵琶物語 初代橘旭翁伝』⁴を主な資料とし、関連する出来事を抜粋した略年表を作成した(【表】参照)。

(1) 橘智定(一丸智定/橘旭翁)

多くの資料で「筑前琵琶の創始者」として紹介される橘智定は、江戸時代末期に筑前に展開していた筑前盲僧琵琶の一派である玄清流⁵の僧侶一丸妙福坊真定の長男として、嘉永元(1848)年に博多に生まれている。幼名は一丸鹿太郎、父も祖父も盲僧琵琶を生業に、また祖母は三味線を嗜む環境に育ち、鹿太郎も八歳で祖父の智定の名前を継いで一丸智定と名乗り、十代後半には琵琶を教授できる腕前になっていたという。

折しも江戸期から明治期へという時代の変わり目には、それまで琵琶楽を特権的に専業としていた盲僧達が、幕府の庇護を受け官位を与えられていたその組織である当道の廃止(明治4(1881)年)に直面し、従来のような檀家回りの祈祷やお祓いの弾奏だけでは生活できなくなってきた。そこで、いわゆる「くずれ」と言われる本来の宗教的説教や祈祷ではない娯楽的な楽曲を、各種の集会での余興として、さらには筑前琵琶の弾奏自体の鑑賞を目的とした遊興娯楽の場において、柔軟かつ魅力的に語ることが求められるようになっていた。井

上精三の調査によれば、幕末にはこの「くずれ」の中に長編の「段物」と小品の「端物」とが現れ、段物には《大江山鬼退治》や《義経奥州下り》《児雷也仇討》などの近世の各種の語り物や演劇の中でよく知られた物語を語る曲が、また端物には《鯛の婿入り》《八百屋づくし》などの三味線の端唄や小唄から借りたユーモアや言葉遊びを趣向とする曲が語られるようになっていたという⁶。十代の智定はそうした時代に筑前盲僧琵琶に三味線の調弦法を取り入れることで筑前琵琶の新しい響きを模索し、明治期に入った二十代後半に薩摩琵琶の名手の演奏に出会って薩摩琵琶に強い関心を抱くと、明治14(1881)年には三十代前半にして薩摩琵琶を研究するために薩摩に出向き半年間滞在している。この薩摩滞在の後には肥後・長崎・対馬を巡って各地の芸能を取材し、肥後の方言を多用し滑稽さを盛った軍談や仇討物を語っていた肥後琵琶や、三味線の本調子を取り入れていた長崎琵琶、長崎を中心に流行していた明清楽などにも触れ、明治18(1885)年には東海道を上って東京に入り、大隈重信の催した琵琶会に薩摩琵琶の名手西幸吉と共に出演する。盲僧の家に生まれながらも晴眼者でもあった智定は、時代の変化の中で、もはや僧侶としてではなく琵琶を手に興行する芸能者として琵琶を奏でることを目指し、娯楽性・芸術性の高い琵琶楽を創作しようとしていた。明治20年代、四十代になる頃には同じく新しい琵琶楽を創ろうとしていた鶴崎賢定や吉田竹子と活動を共にするようになり、明治30年代より奏法や楽曲を大きく改良した自らの琵琶楽を「改良琵琶」「筑紫琵琶」と称して、明治32(1899)年に御前演奏などの機会を経ると、東京で愛好家を増やすとともに福岡に筑前琵琶旭会を創立する。

(2) 鶴崎賢定

橘智定の誕生より十六年後の元治元(1864)年に智定と同様に博多の筑前盲僧法師の鶴崎大泉坊円定の家に生まれ、盲僧琵琶に親しんで育ったのが、鶴崎賢定(本名 賢次郎)である。両親が小島姓の別家となり、三男の賢定は祖父の大泉坊円定に育てられた。円定は智定の父妙福坊を頻繁に訪ねていたので、少年時代の智定は来訪した大泉坊円定の筑前盲僧琵琶の弾奏にも触れていることが智定をめぐる資料にも見られ、祖父の手ほどきで琵琶を習得した賢定が十三歳にして智定の妹のこま子と結婚していることから、いずれにせよ賢定と智定は、年齢は離れているものの同業者として比較的親しい間柄にあったと想像

される。しかし賢定は、こま子との間に二女をもうけながら数年で離婚、生来の遊び好きで呑気で奔放な性格から琵琶だけでなく博多にわかをはじめ様々な遊芸に熱中したようで、そうした豊富な経験と持ち前の声量や声色の力強さが賢定自身の表現を広げ、聴く者を魅了したようだが、彼の技芸の後継者は橘智定ほどには育たず、彼を流祖とする鶴崎流は博多の小さな流派に留まり、現在では流派名が残るだけに等しい状況である。そのため賢定の経歴については記録が少なく、詳細な情報が見いだせていない。明治 29(1896)年には橘智定、鶴崎賢定そして吉田竹子の三人が大浜の恵比寿座で合同琵琶演奏会を催しており⁷、この演奏会が筑前琵琶の成立史を見る上での一つの起点と考えられる。

(3) 吉田竹子

吉田竹子は、明治 4(1871)年福岡藩士栗山幽齋の娘として生まれた。幼くして両親を失くし、加藤善吉と杉子という夫婦の養女になるが、養父の放蕩から養母の実家の吉田姓を継いだ。しかし困窮した養父によって 13 歳で博多の遊里柳町に売られ、芸妓金時となる。芸妓になった竹子は三味線のほかに八雲琴や流行り始めた明清楽の中国琵琶を習ううちに芸事の才能を発揮し、4 年後の明治 20(1887)年には『開化福博自慢』に新茶屋の料亭福屋の筆頭芸妓として名前が上がっている⁸。その竹子を明治 23(1890)年に身請けしたのが博多の造り酒屋萬屋の娘の婿養子で二十代前半にしてすでに若き大富豪だった加野熊次郎(慶応 2(1866)～明治 36(1903)年)である。加野自身が美術や音楽芸能に関心が高く、家業は妻に任せ、妾の竹子を連れて長崎まで中国琵琶を習いに出かけたり、当時はまだ一丸姓だった橘智定を招いて筑前盲僧琵琶の教授を依頼したりした。それまで盲僧琵琶が女性に伝授されることはなかったので、女性として盲僧琵琶を習得したのは竹子が初めてだったのではないかと言われ、筑前琵琶がその後女性奏者を中心に発展する出発点もここにあってだろうと、井上も指摘している⁸。加野は博多周辺で一芸をもつ音楽家たちを集めて「鈍楽隊」というグループを結成し⁹、そのメンバーには加野と竹子はもちろん橘智定や鶴崎賢定もいて、新しい琵琶楽の研究に勤しんだ。加野は竹子の琵琶演奏や琵琶作歌をめぐるはなかなか厳しい批評家であり指導者であったと同時に、有能なプロデューサーだったようで、智定に琵琶を習った竹子が、師の智定と鶴崎賢定と 3 人で明治 29(1896)年そして明治 31(1898)年にも合同

琵琶大会を開催している¹⁰のは、加野のプロデュース力に依るところが大きかったとみられる。また竹子は二つの合同演奏会の合間の明治30(1899)年に加野と共に上京した折に向島や浜町で新しく作った琵琶歌を披露し、それを「筑前琵琶」と称している。

以上、三人の名手の経歴と各人の筑前琵琶成立との関わりを見ると、明治中期の博多に筑前琵琶が生まれた経緯には二つの要因が見いだせる。ひとつは、筑前盲僧琵琶を伝承する環境に生まれながら時代の変化により盲僧琵琶から脱却した新しい琵琶楽を創造する必要と欲求そして能力を持ち合わせた二人の琵琶奏者(橘智定と鶴崎賢定)が同時期に出現したこと、そしてもうひとつは、優れたプロデュース力を持つ支援者加野熊次郎の存在と彼によって芸能人としての魅力とパフォーマンス力の才能を引き出された女性奏者(吉田竹子)との出会い、さらに加野による三人の活動のプロモーションである。

そしてこれらの背景には、明治期という、政治も経済も文化も大きな改革期にあってそれまでの時代の権威や慣例に捉われずに新しい人材が新しい活動や事業を起こそうとし、そのための人間交流が活発に行われたという時代性も感じられる。筑前琵琶という新しい音楽自体の魅力もさることながら、筑前琵琶による新しい響きや新しい作品が生まれる瞬間に立ち会うことが、時代の変革意欲や新事業展開の気運と呼応して、筑前琵琶という新しい音楽の大流行を後押ししたように感じられる。

2. 筑前琵琶の東京進出と旭会の発足

維新とともに旧薩摩藩士が江戸(東京)へ頻繁に出向くようになり、薩摩琵琶の琵琶歌が天皇の御前演奏などの機会も得て、東京で薩摩琵琶の知名度が上がったのが明治10年代であった。薩摩出身の琵琶奏者西幸吉(安政2(1855)～昭和6(1931)年)・平豊彦(明治3(1870)～明治41(1908)年)・須田綱義(生没年未確認)・吉水錦翁(初代;弘化2(1845)～明治43(1910)年)らの名手が次々に東京で演奏を行ったのを追って、橘智定・鶴崎賢定・吉田竹子の三人も東京へ進出する。さきにも述べたように、これは人脈と財力のある加野熊次郎のプロデュース力にも支えられ、まずは東京から福岡を来訪中の商工界の重鎮や政界の有力者が集う場で竹子に演奏させたり橘智定を紹介したりするこ

とで、筑前琵琶の東京での認知や評判を高め、次には東京での演奏披露の場作り、その結果、明治 32(1899) 年には智定の御前演奏が実現している。智定の御前演奏に先立つ明治 30(1897) 年に竹子は加野と上京して有力者の集まる席で演奏をしているが、加野の働きによって新しい筑前琵琶の演奏披露に触れた当時の各界の人物として、雑誌『琵琶界』の記事に名前が見られるのは、福岡出身で農商務次官を務めていた金子堅太郎、第十代逋信大臣の野村靖、第十一代内務大臣の樺山資紀、幕末の外交使節の一員でジャーナリスト兼劇作家でもあった福智源一郎、大倉財閥の設立者で帝国ホテルや大成建設そして東京経済大学も創始した実業家の大倉喜八郎、常磐津節の名手で一度は常磐津の名跡を返上しながらその美声ゆえに役者に請われて戻っていた初代常磐津林中、清元節の当代の大人気太夫清元お菓らである¹¹。加野は、新しい芸能を発表し周知普及する・・・言葉は良くないが「売り込む」ために、政界、外交界、報道界、経済界そして芸能界の有力者に直接聴いて味わってもらうことを重視し、確実にそれを実行したことがわかる。竹子は東京での演奏以降、一旦福岡に帰郷するが、再び上京して赤坂田町に住居を構えて東京で教授生活を始める。そして加野のプロデュースにより有力者への演奏披露を実現した成果として明治 32(1899) 年に御前演奏を果たした橘智定も、翌明治 33(1900) 年に達邑容吉作の 27 首の歌に作曲自ら演奏披露し、この新作への評判に手応えを得ると、翌明治 34(1901) 年に名前を橘旭翁と改め、伝統邦楽界の慣例を取り入れて家元制度を採用して弟子に「旭」の字を冠した芸名を授けるようになり、筑前琵琶が人気を集め出した東京へ移住することとなる。

ここで注目したいのは、橘智定改め旭翁も吉田竹子も筑前琵琶の人気を実感し、教授業に本腰を入れた場が東京であった点である。筑前(福岡)出身の智定や竹子が、盲僧琵琶を基に、博多芸妓との交流の中で娯楽音楽としての琵琶楽のスタイルを模索して生み出した筑前琵琶であるが、その面白さに人々が注目し人気を博したのは東京であったという点は興味深い。発祥地の福岡で大きな成功をおさめたから上京して興行したというよりも、プロデューサーの巧みな企画宣伝力のもとに東京で披露してみたところ、大きな反響を得ることができた。そこで東京を最初の拠点として教授のための家元制度を整え(旭翁を名乗り)、東京での人気に刺激されて地元福岡でもそれに追随するかたちで人気が上がってくると、流派の本部として福岡旭会を明治 42(1909) 年に福岡で発

足する。さらに福岡旭会発足の2年後には東京に「大日本旭会」が立ち上がり、福岡はその九州支部という位置付けに変化している。筑前琵琶は、発祥地福岡よりもむしろ東京の観客や愛好家（その中には福岡出身者を少なからず含む）の支持を得て、上演や教授も東京での需要が高かったとみられる。つまり筑前琵琶は、東京だからこそ際立ったそのサウンドの物珍しさであるとか、福岡出身で東京に身を置く者にとっては懐かしさに繋がる味わいが、人気を誘引した部分が少なくなかったとも考えられる。特定の地方色を携えた芸能の魅力は、地元を離れた場で上演された時、あるいは地元を離れた者がそれに触れた時に、改めてその魅力が大きく評価されたり人気を博したりすることは、現代の文化事情の中にも見られる現象だろう。

3. 筑前琵琶歌の新作

橘・鶴崎・吉田の三名人が明治29(1896)年に合同演奏会に出演する前後から、智定が演奏する曲目に多くの新作曲が出現する。明治20年代に智定が門下生をとって稽古を始めた当初の稽古曲は、当時の門下生の述懐によれば、筑前盲僧琵琶の伝承曲のうち「くずれ」と言われる娯楽性を帯びた数曲や薩摩琵琶の伝承曲の応用だったというが¹²、次第に智定の弟子や智定の演奏の愛好家の中で文筆の才に長けた者達が琵琶歌を作歌するようになる。のちに読売系の西日本新聞となった九州日報の前身である福陵新報の記者で作家の今村外園をはじめとする数名が、謡曲素材の題材（例、《小督》《七騎落》）や、平家物語の題材（例、《扇の的》）、あるいは幕末の戊辰戦争などの逸話を素材とするような曲（例、《西郷隆盛》）を改作あるいは新作しているのだが¹³、ここで注目したいのは、そういった新曲とは別に、明治31(1898)年に日本赤十字社総会の慰労会に招かれた橘智定が、《日本の赤十字》という新作を演奏していることである¹⁴。この曲の詞章の詳細はまだ明らかにできていないが、招聘主である赤十字という組織を題材とした新作が披露されているところに、筑前琵琶が自らの発展を促し支えた、作品題材のあり方や新作の創作姿勢の特質が見て取れる。初代旭翁の作曲として現在伝承されている曲は、大坪の『筑前琵琶物語』巻末にまとめられた一覧表からは200曲近くあることがわかるが¹⁵、タイトルだけから想像しうる範囲でも、必ずしも謡曲素材や平曲や薩摩琵琶のレパートリーの域におさまらないと思われる独自の題材を多数扱っている。

筑前琵琶は近代の新しい(既存の種目を「改良」した)ジャンルであるがゆえに、その成立当初から上演曲目においても聴衆の期待に応える内容を重視してきたのではないだろうか。

4. まとめ—筑前琵琶の成立の経緯からみえる特質と現代の様相との関連

以上、本稿では、筑前琵琶という近代の新種目を明治後期に成立せしめた三人の琵琶奏者と、その三人を支えたプロデュース力および財力のある協力者の活動の経緯を辿り、筑前琵琶の基となった筑前盲僧琵琶の伝承地福岡と当時の新しい文化の展開や発信の地である東京という場の関係性の中で独自の成立過程を経たことを再確認した。そこには、音楽芸能が、社会の多様な側面を動かしている各界の人々の交流の中で潤滑油として働くことが期待され、その期待に応えることでその音楽芸能が存在価値を増し、新しい表現や作品を生み出す可能性があることも改めて認識できた。

本稿の冒頭で紹介したような、昨今の福岡における様々な催事の中で演奏されている曲目(新作曲)の多くは、戦後の福岡で筑前琵琶を再び盛んにしたいと昭和40(1965)年に発足した筑前琵琶保存会の主宰者である旭会出身の琵琶奏者 嶺旭蝶¹⁶とその弟子たちの作品である。本稿では筑前琵琶という芸能のもつ性質を知るために、その成立過程を中心に辿ったが、明治後期に成立し、すぐさま人気がうなぎのぼりとなって大正期に最盛期を迎えた筑前琵琶は、昭和に入るといとも簡単に人気が廃れてしまう。それでも必死に伝承し続けた在福の伝承者たちは、昭和後期から筑前琵琶の復興を願って積極的に新作を発表したり、芸能存続のために聴衆や支援者を獲得すべく、人の交流する社会の様々な場面での筑前琵琶の演奏活動を重ねている。本研究では、本稿で確認した筑前琵琶の成立の経緯に現れたその特質を踏まえつつ、今後は戦後昭和後期の福岡における筑前琵琶保存会の活動の詳細な調査を継続する。そして、まだまとまった記録のない昭和後期以降の多様な筑前琵琶歌の作品や作者を記録にとどめ、社会の中で独自の役割を担いながら生きる芸能としての筑前琵琶の伝承や音楽性について研究を続ける所存である。

注釈

¹「筑前琵琶」『邦楽百科事典』1984年 音楽之友社 651p.

- ²『西日本文化』88～99号 1973～1974年所収
- ³『福岡地方史談話会会報』第14号 1974年所収
- ⁴1983年 葦真文社刊
- ⁵筑前盲僧琵琶の本山とされる天台宗成就院(福岡市)の碑文では、天平神護2(765)年に太宰府に生まれた橘玄清が、延暦年間(780年代)に京都の天台宗総本山の延暦寺で盲僧琵琶を習得し、延暦8(789)年太宰府に創建した成就院にそれを伝えたものを玄清流筑前盲僧琵琶と呼び、福岡の盲僧琵琶の正統的な流派と説明している。
- ⁶井上精三「筑前盲僧と筑前琵琶」9p.
- ⁷入江寿紀「明治の筑前琵琶(2)」『西日本文化』89号 38p.
- ⁸井上 前掲資料 13p.
- ⁹井上によれば、日清戦争時に福岡市で結成された西洋音楽の楽隊「博多音楽隊」に対抗するかたちで、一芸をもつ博多の若者によって結成された邦楽の楽隊だったという。
井上 前掲資料 14p.
- ¹⁰井上 前掲資料 14p.
- ¹¹『琵琶界』第4号に所載記事あり、と井上 前掲資料 14p.に紹介あり。
- ¹²大坪草二郎『筑前琵琶物語 初代橘旭翁伝』45～47p. 50～51p.
- ¹³大坪前掲書 50p.
- ¹⁴大坪前掲書 78p.
- ¹⁵大坪前掲書 223～235p. 所収 筑前琵琶(作詞者・作曲家)一覧表
- ¹⁶嶺旭蝶は、明治44(1911)年北九州市生まれの筑前琵琶奏者で、旭会に所属したが、戦後は博多で旅館を経営しながら琵琶の教授と演奏に従事、昭和40(1965)年には筑前琵琶保存会を発足し、なかでも国内外での公演で異種目との共演をはじめ様々な新曲の創作発表を意欲的に行った。昭和57(1982)年福岡市文化賞受賞、平成10(1999)年4月没

参考文献

- 大坪草二郎『筑前琵琶物語 初代橘旭翁伝』葦真文社 1973年
- 入江寿紀「明治の筑前琵琶(1)～(9)」『西日本文化』88～99号 1973～1974年
- 井上精三「筑前盲僧と筑前琵琶」『福岡地方史談話会会報』第14号 1974年 2～21p.
- 筑紫豊編「筑前琵琶史」『筑前琵琶』筑前琵琶製作技術調査委員会 1977年
- 金子厚男『琵琶という二字 一聞き書き・嶺旭蝶の60年』筑前琵琶保存会発行 1983年

【表】筑前琵琶成立をめぐる歴史年表

| 歴の中の出来事 | 時代 | 元号 | 西暦 | 演奏家の展開 |
|-------------------------------|------|------------------------|------|--|
| 大政奉還 | 江戸 | 嘉永元年 | 1848 | 一丸智定(うちの親雅輔)誕生(父一丸妙智：玄清流音僧) |
| | | 安政5年 | 1858 | 作野倉今村外郎誕生(博多外音門) |
| | | 安政6年 | 1860 | 一丸智定13歳、琵琶を習い始める？ |
| | | 元治元年 | 1864 | 輪崎寛定誕生(博多)(父は輪崎円定) |
| | | 慶応2年 | 1866 | 加野黒次郎(うちの宮田竹子の夫加野黒次郎)誕生(博多中興堂町) |
| | | 慶応3年 | 1867 | |
| 官制の戦国幕府止 台湾出兵 大政で明治維新の途 | 明治 | 明治4年 | 1871 | 宮田竹子誕生(福岡県土肥山鹿郡の子：宮田姓は舅母の奥家姓) |
| | | 明治7年 | 1874 | 長子一丸一一定(うちの2代目雅輔)誕生 |
| 四国戦争 | 明治 | 明治9年 | 1876 | 一丸智定の甥一丸雅彦誕生(筑紫郡春日村) |
| | | 明治10年 | 1877 | 輪崎寛定(13歳?)、一丸智定の孫こま子と結婚 曾で明治派(月琴・琵琶・箏)が流行 |
| 朝鮮壬午の乱 | 明治 | 明治12年 | 1879 | 高峰秋風誕生(博多対馬小島) 明治11年生まれると云々 |
| | | 明治14年 | 1881 | 一丸智定、隠岐に赴き琵琶講習を研究(半年滞在) 智定の高弟となる安部崇康(船泊)誕生(博多) |
| 朝鮮壬申の乱 | 明治 | 明治15年 | 1882 | |
| | | 明治16年 | 1883 | 宮田竹子博多の遊藝場町に売られる(13歳：琴娘名 金駒) |
| 日清戦争 | 明治 | 明治17年 | 1884 | |
| | | 明治18年 | 1885 | 智定の歳で船松の孫 秋松道康誕生(博多赤間町) |
| | | 明治20年 | 1887 | 宮田竹子、博多新茶屋科亭福屋の茶屋茶楼に 博多の隠岐流(明治派?)が盛んに演奏活躍 |
| | | 明治23年 | 1890 | 宮田竹子も加野黒次郎(遊流屋)が弟兼じ 竹子琵琶を学び始める？ 東京の茶楼(日本橋小が浜・橋本小せんら)が琵琶演奏者に |
| | | 明治24年 | 1891 | うちに智定の養子となる橋本康誕生 |
| | | 明治26年 | 1893 | 一丸智定、戦後に没 |
| | | 明治27年 | 1894 | 高野短鬼誕生(博多：祖父は成徳流系琵琶法師高野門正村、父は琵琶大工高野龍雄) この頃、今村外郎・加野黒次郎・宮田竹子の三者で琵琶曲を創作作曲 |
| | | 明治29年 | 1896 | 宮田竹子福岡流琵琶演奏に新茶屋の茶客衆と交流 備・宮田・輪崎 総合琵琶演奏会開催(大浜 藤比海邊)? |
| | | 明治30年 | 1897 | 宮田竹子、加野黒次郎と上京 向島大倉町邸・浜町料亭で「筑前琵琶」と称して演奏 浜町では、堀地屋一郎・大倉幸八郎・指巻神林中・清光お栗らが活躍 |
| | | 明治31年 | 1898 | 加野、琵琶講習の西本宮の演奏会開催(鳥成楼) |
| | | 明治32年 | 1899 | 備智丸御前演奏(小松富・島后) 演奏者を含む幅広い弟子をとるようになる |
| | | 明治33年 | 1900 | 油屋春宮(つじむら)作の27首の琵琶歌に備智丸が作曲し演奏 |
| 明治34年 | 1901 | 備智丸、真知病に感染し、東京に永住を決める | | |
| 明治36年 | 1903 | 加野黒次郎流決(3流) 竹子琵琶演奏を始める | | |
| 日露戦争 | 明治 | 明治37年 | 1904 | 高峰秋風、日露戦争中に福岡で宮田から學んだ琵琶を演奏 一丸雅彦の長女きく(うちの船崎)誕生 宮田竹子福岡で待合茶屋 竹屋家を閉鎖 |

| | | | | | |
|--|------|-----------------------------|--------------|---|---|
| 第一次大衆に参戦 シベリア出兵 関東大震災 NHK開局 田中一平率領 選手 チャーリン来日 日劇開場 宝塚劇場 開場 | 明治 | 明治39年 | 1906 | 高峰筑風「新派筑風團」を称し、神田東広亭で演奏 永田鳩心 團長 團員 鳩心流を創始 宮田竹子は伊藤博文を逢って放聲 | |
| | | 明治40年 | 1907 | 宮田竹子神田東広亭で《台湾入り》を演奏 | |
| | | 明治41年 | 1908 | | |
| | | 明治42年 | 1909 | 福岡で船倉見立式開演 博多で三洲合同演習大会開催 | |
| | | 明治43年 | 1910 | | |
| | | 明治44年 | 1911 | 油島春宮の琵琶歌が東京大塚劇山堂より出願(全3巻77曲 贈言は明治39年) 東京に大日本船倉見立 福岡は大日本船倉見立支部に | |
| | 大正 | 明治45年 大正元年 | 1912 | 高峰筑風 有楽座で高峰琵琶の演奏 高野旭星も東京で人気 | |
| | | 大正2年 | 1913 | 秋波地蔵(筑波館の種) 有楽座で琵琶大会を開催 | |
| | | 大正3年 | 1914 | | |
| | | 大正6年 | 1917 | 宮田竹子 涙千秋とアメリカへ? | |
| | | 大正7年 | 1918 | 琵琶演奏者40名、琵琶人口全国と中国同時で約10,000人(うち7割女性) | |
| | | 大正8年 | 1919 | 横濱新 波 息子旭星が2代目旭星を名乗る(門下生1万人) 旭星の弟子百瀬旭峰 前年に上京し東京でお留琵琶を創始 星田地蔵(支部旭洲の弟子)東京で船倉見立を創設 高野旭星 日本琵琶演奏会(のちのロンドンビレコード)の専員に | |
| | | 大正9年 | 1920 | 2代目旭星の弟旭星が協会(大日本協会)創設 | |
| | | 大正10年 | 1921 | 高野旭星、筑波琵琶人気比へて東京の横濱になる(西は星田地蔵) 今村地蔵(秋波地蔵の弟子)、有楽座で五絃琵琶演奏披露 宮田竹子 涙千秋とアメリカ返帰→大正6? 全国の琵琶演奏の数は約6,000名この調査 | |
| | | 大正12年 | 1923 | 旭星の高弟安部旭洲が八洲会創設 関東大震災被災金募集琵琶大会を博多(川文座)で開催 宮田竹子南渡(53歳) 雑誌『琵琶界』創刊(外地琵琶演奏者計166) | |
| | | 大正13年 | 1924 | | |
| | | 大正14年 | 1925 | 東京放送局増資調査による順位第1位が筑波琵琶 | |
| | | 昭和 | 昭和2年 | 1926 | |
| | | | 昭和3年 | 1928 | 放送局福岡放送所開所部会主催で高野旭星・旭方純英が琵琶演奏会《浪士の来日》演奏 |
| | | | 昭和5年 | 1930 | 福岡放送局開局に高野旭星・旭方純英の《新水放り》を放送 筑波琵琶演奏会本部が調査から分立(調査は大日本放送琵琶演奏会本部が主催) |
| 昭和6年 | 1931 | | 今村外郎南渡(73歳?) | | |
| 昭和7年 | 1932 | | | | |
| 昭和8年 | 1933 | | | | |
| 昭和9年 | 1934 | | | | |
| 昭和11年 | 1936 | 高峰筑風南渡(58歳) 高野旭星南渡(42歳?) | | | |